

牧師室から (2022.6.26)

末期緩和ケアをしている義父のところに、週ごとに医者と看護師が交互に訪ねてくれる。段々弱くなり、様々な症状が出てくる義父を世話している家族にとっては、とても心強い存在である。

ある日の電話であった。義母が受話器をとったら「〇〇〇クリニックです。まだ、支払金が振り込まれていないので、送金をお願いします。送金先をお教えします。」という話であった。慌てた義母は「あら、そうですか。息子に聞いてみますので・・・」と言ったら、そのまま電話が切られたようだ。義母は急いで鈴木牧師に電話をして、彼から「銀行引き落しで手続きしたので、大丈夫だよ」と言われて安堵したようだった。しかし、先の電話は何だろうか、と私たち家族は語り合いながら、これがテレビや新聞で言う、オレオレ詐欺であることに気づいた。〇〇〇クリニックの医者が来るのをどうして知っていたのだろうかと思い巡らしてみたら、庭に泊まっていた在宅医療の車にその病院の名前が大きく書いてあったので、誰かがそれを見ていたのだろうと思った。では、うちの電話番号はどのようにして分かったのだろうか。両親が二人だけでいる時間が心配になって、すぐ、録音することを知らせ、録音と警告付きの新種の電話機を購入して、設置しておいた。

つづいて、その後のことである。制服を着た警察官が訪ねて来て、近くの家で、詐欺被害があったので注意してください、ということを書いてくれた。

「この頃、偽札が流行っているのです、御宅のお金を確認してみたい」ということで、近所の方が4,200万円をその怪しい人に渡したようだ。家にそのような大金を置いてあったのも驚きであるが、そんなにお金があることを知っていたのと、それを渡してしまったことも不思議である。うまい話に我を忘れてしまったようだ。そのような事件を丁寧な伝えてくれた親切な警察官に感謝の挨拶をして見送ったが、ふと、この人も本当の警察であるのだろうか、その人まで、怪しく見え始める気持ちがして、母と話し合いながら苦笑いをした。

大きな家に年老いた方のお一人暮らしが多く、出かける時も玄関の門を閉めず、気楽な生活であった東北のある町を思い浮かべながら、そのような生活が昔話のように思われた。本当に暗闇に囲まれているかのようなこの世の生活である。しかし、「光は暗闇の中で輝いている。・・・(ヨハネ1:5)」というみ言葉を覚えながら、真の光である主イエス・キリストに、希望を置いて、委ねる歩みでありたい。

(鈴木善姫牧師)